



月刊 第572号

# 初夏と真冬

## 同居の春彼岸

開年の今年は十七日から彼岸の季節を迎えたカモメ達も思いの入り、全国的に好天に恵まれ、思いに陽当りのよい岸壁で戯れ初夏を思わせる二十度を越す気合つたり海へ浮かんだり潜って温の上昇に汗ばむ程の一日、水みたりと気持よさそうである。もぬるみアオサ採りやワカメ採り卒業、受験、就職、転職、転勤、町役場で磯辺は時ならぬ賑わい、恋場の移動など悲喜交流話題豊富



三月七日本山小学校の閉校式が行われた。春の雪に覆われた校庭、児童を見守りつづけた門柱脇の二宮金次郎像も一寸淋しそう。



大地は已に春を主張している。雪割草が咲き二輪草、カタクリ、イヌフグリと可憐な春の花々がつづく。サクラの蕾も日毎ふくらむ。



思わぬ雪が又やってくる思わぬ自然の演出がある。鳥よけの網に春の淡雪と風がこんないたざらをする。大量死するニワトリ達への鎮魂の鳥籠か。

な季節である。

そろそろ桜前線の手報も始まり今年は例年より十日程早い開花となりそうとのことで彼岸を境に本格的に春になったかと思っただけなら翌日は二十度も温度差のある冬へと遊戻り雪の舞う一日となり弥彦山も再度雪化粧。それでも春分の日からの連休は再び春の陽射しに戻ってひと冬越して落葉や松ぶしの散乱していた寺々の墓地もさっぱりと彼岸の掃除がなされ春らしい花が供えられ本堂で厳修される彼岸法要の読経の声や鐘の音が聞こえる中お参りの善男善女の姿が石段を昇り下り。海も穏やかに春光の中で港灣工事の船もクレンを高くと空に掲げて動きはじ

### 炭を焼く人(続)

さとう・のぶひと

二月二十日(金)から二十二日(日)までの三日間、文化センター「はまなす」において「寺泊在住作家・県展入選者作品展」というタイトルの展覧会が催されました。寺泊在住作家は近藤嘉(洋画)、笹川英志雄

(日本画・書道)、長原實(版画)、橋本直行(洋画)の四氏。また、寺泊在住の県展入選作家は佐藤準子(日本画)、三浦猛幸(洋画)、川崎猛(洋画)、川端光子(書道)、和田昌子(書道)、星紀夫(書道)、有坂幸子(書道)、和田幸蔵(版画)、西山孝(書道)、藤田優子(書道)の十氏。前に中村編集人も本誌に書いておりましたが、平成十五年度県展は寺泊在住者の入選がごとく多く、七氏におよびました。文化の町寺泊の面目を内外に知らしめた快挙でした。本山小学校が百年の幕を閉じて寺泊小に統合されることになり、去る三月七日(日)、閉校記念式典が催されました。



思わぬブームに町が湧く。二月初旬放映の皇室アルバムで愛子さまが遊んでおられたタコの紙風船。新潟県寺泊町で作られているの解説に全国から問い合わせが殺到。忽ち宮内庁御用達となる。



北帰行直前の白鳥達は長旅に備え田圃に飛来して動き出したタニシや小エビ等を漁る。116号線沿い大河津分水架橋脇の田圃も大賑わいである。



これ又早春の風景。松喰虫の子防は、松が水を揚げる前の作業。町の公園には四株の多行松がある。予防接種作業。

一般的に、卒業生は自分の出身校を「母校」と呼んでいます。「孟母三遷」、儒教思想の名残りでしょうか。教育が母親の手に委ねられてきた歴史を表現しているとも言えます。

本山小の卒業生にとって、母校が消滅することの悲しみはいかばかりでしょうか。母親を失うほど重みのあるものと思われ

ます。

学校統合は着々と進行しており、すでに夏戸小が平成十七年四月より大河津小に、また野積小も寺泊小に統合される見込みです。従って平成十七年度から、寺泊町の小学校は寺泊小、大河津小の二校になります。

平成十六年度、小学校の新生児児童数は合計九十四名。とうとう百名を切りました。中学校の卒業生が百三十九名。かつて旧寺泊中の校歌に「健児一千」と歌われ、町中のどこへ行っても子どもで溢れていた時代の活気が夢のようにです。

さて先月号で紹介した「炭を焼く人」、京ヶ入の竹内さんか入っています。炭のカマ出しに立ち会いました。四日間、カマドを冷ました後のことです。わくわくしながら、密封した焚き口を開けるのを手伝いました。

開けてびびり。あれほど焚き口の目一杯まで原木の櫛と竹を詰め込んだのに、残ったのはその三分の一にも満たないのです。竹内さんの話によれば、排煙口での検温が約四百度、中はその倍の七百度から八百度になっ

ていたはず、もう少し早めに焚き口の密封、火消しをすべきたった、とのことです。櫛の木はほとんど絶えてしまいました。上質の竹炭が取れました。

その竹炭をもらってきました。炭の活用法はいくつか知られて入っています。まず冷蔵庫や下駄箱にと。とくに竹の炭は性能が高いと言われています。飲料水の浄化。水道水がまるやかな口当たりになります。炭をよく洗って炊飯に使うとふっくらした美味しいご飯が出来ます。畑に入れば有効微生物の住みかとなつて土壌改良に役立つだけでなく、おいしいのせいかタヌキが近寄りません。

しかし前から使ってみたく

思っていたのは、暖房用です。何十年も休んでいた火鉢の出番です。さっそく火鉢を探し当て、竹炭をガスレンジでおこしてアクに埋けました。アクが湿気を吸っているだろうから、すぐに吸っていい物にならないかと思って、よししたら、どうしてどうして、竹炭は真っ赤におこって、心地よい暖かさ懐かしいにおいを送ってくれたのです。

寝る前にアクをかけておくと火種は朝まで持ちます。朝、炭を縫い足せば同じ火をずっと維持することが出来ます。アクが火の制御装置としていかに優れているかを知りました。

ふと、十年前のベストセラー「5000年前の男」(コンラート・シュピンドラー、畔上司訳、文藝春秋、1994年)を思い出しました。1991年、ヨーロッパ・アルプスで凍結ミイラが発見され、調査の結果、約五千年前、新石器時代の人物と推定されました。この人物の携行品に、火打ち石の他、カエデの葉に包まれ炭化した「オキ」(火種)があったというのです。

極寒のアルプスですから、煮炊き用というよりは暖房のためだったのでしよう。アクは携行には適さないでカエデの葉を用いたものとみられます。

火種を維持する技術と発火装置を新たに開発する技術。火鉢の炭火を眺めながら、新石器時代からの技術の集積について考えさせられました。

### 少年時代のこと

大町 松田圭司

さてここで小学校時代のことを思い出してみます。

昭和十六年十二月大東亜戦争(第二次世界大戦)に突入すると、にわかになりは戦争色の強い雰囲気になり、その翌年男の若い先生の少なくなった寺小に二十八歳の活きのいいY先生が赴任され四年生の私達のクラス担任にされた。先生の役割は私共小国民(と呼んでいた)の戦事教育にあるらしくそれはきびしいものでした。クラスを第一小隊と第二小隊に分け、級長副級長がそれぞれの隊長となりその下に六分隊を置く事から始まりました。何事も連帯責任



群馬のダルマ屋が現れるのも春の訪れの象徴。かつては大きな籠を天秤の前後にぶら下げたの行商。ほめる客はあてにならないが、けなす客は大いに脈ありとか。

で賞罰を受けました。

先生は音楽が特に堪能で合唱指導などにも秀でていて、私達は何となく優越感を味わっていました。ただドレミは敵国語で不可とばかりハニホヘトイロハに変えさせられ、和音をピアノで弾きドファラは「ハヘイ」ミレゾは「ホニト」と素早く答えなければなりません。敵機の音を識別する為の耳の訓練だそうを間違えるとシッコチョコ竹(根曲り竹)が遠慮なく飛んできました。その頃ラジオでは国民歌謡で「空の神兵、落下傘部隊に捧ぐ」とか「トントントンカラセウ。又夏休みの宿題はゲンノショウコやドクダミなど干した、薬草やススキの乾草の束の提出、勤労奉仕は「松根油採取」や砂浜での「塩たき」の為の薪運び



紙人形製作を習っていると言う家の雛段。作品の数々が勢揃い。オモチャのチャチャチャは賑やかな人形達の夜の遊戯。こちらはひそやかな人形達のおしゃべりが育からはじまる。

でいました。

戦争も末期になると金物が不足になり、家庭では真鍮の仏具やらお寺の仏具、梵鐘などまで檀家に見送られ出征して行きまじただけです。食糧難はもっと深刻で配給の米にさつまいもなどを入れた雑炊などが日常の食事で、子供達はいつも腹をすかせていました。そんな頃、今まで走り廻っていたグラウンドを耕してカボチャ等を植え昼食の時に葉と一緒にした味噌汁がたまに出たりしてその味は今でも忘れられま

でした。松根油は航空機の燃料に混ぜると不凍液になると言うことで、松の幹に矢形に傷を入れて沁み出る松脂を竹筒や空缶に集め、当時和島にあったと言う精製所に運んだようでした。薪運びは年友の山から金山の海岸まで薪を背負って運ぶわけですが腹がへってへなへなと歩く有様でした。

### 誌代御後援(敬称略・順不同)

- 東京部 金沢 平八 金三千元
- 〃〃 樋口 金一 金五千元
- 神戸市 岡田 吉弥 金一万元
- 新潟市 長谷川 邦好 金三千元
- 分水町 嘉村 正規 金三千元
- 和島村 竹内 孝太郎 金三千元
- 納谷 元祐 金五千元



又町からなつかしい建物が一つ消える。能登屋小路入口の清水屋。ひところ一文店の頃は子供達のたまり場だった。

- 寺泊町 倉井 政博 金三千元
- 〃〃 解良 照子 金三千元
- 〃〃 西山 静一 金三千元
- 〃〃 小林 康一郎 金三千元
- 〃〃 平野 茂雄 金三千元
- 〃〃 桑原 松雄 金三千元
- 〃〃 橋本 繁保 金三千元
- 〃〃 杉沢 繁雄 金三千元
- 〃〃 指田 孝平 金三千元
- 〃〃 白石 屋 金三千元
- 〃〃 小林 馨 金三千元
- 〃〃 シノハラ 義一 金三千元
- 〃〃 遠藤 義一 金五千元
- 〃〃 五十嵐 ヨイ 金三千元
- 〃〃 民宿 渡安 金三千元
- 〃〃 角原 昇 金三千元
- 〃〃 近藤 玉郎 金三千元
- 〃〃 杉田 幸太郎 金三千元
- 〃〃 加勢 辰亀 金三千元

### 小波会二月句会詠草

兼題 早春・葉牡丹他当季

早春の

小川の流れ膨らみて

江原 汀子

早春や

仁王像への大草鞋

外山きよし

早春の

日の移ろいや庫裏の窓

外山 海子

葉牡丹の

渦は枯れたる松葉抱く

斎藤 紫苑

葉牡丹に

静かにひらく自動ドア

加勢 白汀



ひと冬越すと墓地には沢山の松ぶしが溜る。一本の松からどれ位の数が落ちるのか。そろそろ彼岸のお墓掃除の季節。

寝ふかき

夜を抱きて葉牡丹は

小形 美代

はめられて

孔雀葉牡丹前へ置き

水沢 蕉子

冴返る

明日旅立ちと待つその日

竹内 霍山

殷々と

尽きぬ海鳴り肩布団

大越碧水子

口開けて

抜歯待つ間や雪しずる

小島 温石

寒気団

去ればケロリと海わらう

小島 冬扇



港の漁業組合親り場の屋根にずらりカモメの行列。船が入港してくると一勢に飛びたつて餌をねだる。間もなく恋の季節を迎える。

遠方に

住む子の部屋にも福は内

内藤 蓮子

誰が吐息

つくや更夜の雪しんしん

中村 流瓢

春浅し

九十翁の通夜の雨

能登 頑牛

### あとがき

季節的にも又人文的諸活動の上からも春は切り換えの時である。新年に感じる新たな出発への心構えとは又別な出発へ向つての準備が進められているのを感じられる。お天気に誘われてここ数年つづけて来た植樹の地を訪ねて見

る。旧中学校跡地、京ヶ入里山三番公園、水族館前の土手、前坂のあじさい、今年の冬は例年より厳しかつた様子で全般的に枝折れしている木々が多い。そう言えば冬が終つたこの季節は薪木の鶏糞みの季節であつた。秋から冬の間の風と雪で折れた枝や落葉を積んで一年中の焚き物を確保する、山はきちんと掃除されキノコや山菜が育つ環境が整備されることになる。山が荒れる、木々に藤蔓などが巻きつき、行き来の絶えた道は瘦せて困難を極め人との交流を拒む。そんな状況があちこちに見られる山の姿である。それでも椿は沢山の花をつけ植えた桜や樺は枝をみずみずし



間もなく漁期も終りとなるアンコウが腹をみせてずらりと並ぶ。かつてはゲテ物だったが、今は鍋物用で人気者となった。

毎月二十日発行  
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中村 興樹  
発行人 中村 興樹  
発行所 新潟県寺泊町  
ふるさとだより  
郵便番号 九四〇-二五〇二  
ダイヤル局番 〇二五八七五  
電話 二〇二九九番  
電話番号 〇六二〇三三五四五  
印刷所 吉野印刷株式会社